HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	明治期における日本語教本の研究(1) ： S.R.ブラウン著"Colloquial Japanese"と日本語教育における意義
著者	中川，かず子
引用	北海学園大学人文論集，15：147-176
発行日	2000-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

明治期における日本語教本の研究(1)
―― S.R. ブラウン著 "Colloquial Japanese" と日本語教育における意義

中　川　かず子

1　はじめに

今日の日本語教科書事情とその内容概観

日本語を母語としない人々への日本語教育は，現在，国内では大学等への留学生をはじめビジネス関係者，移住・帰国者等を対象に，海外では学校教育の外国語履修者や一般社会人等に拡がり，学習者数は200万人を超えるに至っている。当然のことながら，教材，学習書についても，ここ30年の間にその数は増え続け，日本語教材専門書店の教材一覧(*注1)を見ると，99年度で入手できる教材は3,000点以上，教科書だけでも500点あった。教科書等の教材がこれだけ増えたのは，80年代に入ってからの内外の日本語教育界の動き，また，国際情勢，取り分け日本の国際社会に占める地位とも大いに関係のあることは衆目の認めるところである。国内ではインドシナ難民（現在ではその数は激減しセンターも閉鎖されたところが多いが）や中国帰国者への日本語支援策のほか，留学生受け入れの推進策，さらに90年代に入り，日系就労者の入国を認めた入管法改正，といった施策や社会情勢の変化が多様な背景をもつ日本語学習者の増大をもたらした。海外の状況については，国際交流基金編『海外の日本語教育の現状』の99年度の報告書(仮集計値*注2)によると，1998年調査で約210万人の学習者のうち，初等・中等教育段階が約70%（140万人）を占め（93年の調査時に比べ微増），次いで，高等教育段階が約20%に当たる40万人，それ以外は一般社会人や学校以外での子供が対象となっている。国（地域）別では，韓国，中国，オーストラリア，台湾，米国の順に学習者が多い。こ

うして見ると，海外では学校教育，特に初等・中等教育段階の学習者の増加が注目される。学習者の関心や専門分野の違いも地域によって差があるのは興味深い。大学のレベルで日本語・日本研究を専攻する学生がヨーロッパ，南アジア，太平洋州に多いのに対し，自然科学系の学生が日本語を履修するのは中国，韓国に多い(前述の報告書—93年調査—より)。全体的な印象として，海外では学校教育の外国語科目としての需要が高いということ，その中で，日本語・日本研究の分野に加えて実用的な日本語の習得に関心が向けられていると考えられる。

こうした国内外の日本語教育の発展を背景に，教材が多様な形で生み出されてきた。特に80年代以降，外国語教授法の影響もあって，学習者と学習目的の多様性，シラバスとコースデザイン概念，コミュニケーション能力の重視等がキーワードとなり，これらに対応できる教科書，教材が続々と誕生するようになった。それにもかかわらず，日本語を本格的に学習する人達は，文法の解説書と語彙や表現の対訳表を参考にしながら，文型・構文を中心に構成された〝古典的な〟教科書から入る場合が少なくない。また，欧米の日本語研究者達の著した教科書の多くが文法，語彙・表現の解説（Notes）を付した上で会話や読解文を展開している点も興味深い。Erna Harz Jorden著“Beginning Japanese”(Yale University, 1963), Hibbett & Itasaka著“Modern Japanese”（文章読本／Harvard Univ., 1965), Antonio Alfonso著“Japanese Language Patterns”(Sophia University, 1966)などは，米国を始め英語圏で使用されてきた教科書だが，日本でも入手できたことから，教材の少ない当時の日本では日本語学習者と教師にとって，教科書としてだけでなく貴重な参考書としても重宝がられたものである。日本人教師の中でも外国語教授法を心得ていた長沼直兄もまた，“Basic Japanese Course”(1950)にSupplementary Textbookとして“Grammar and Glossary”を著し，外国人学習者が理解できるように細かな文法と語彙の解説を行った。これら欧米系，または英語圏の学習者向きに出版された教科書には“Grammar Notes”の重要性を支持する点で伝統的に共通する傾向が見られる。

日本語の教科書が英語やフランス語の会話教本に比べ多くの点で古典的な要素を残しているのはなぜなのだろう。いくつかの理由が考えられるが，対象者とその学習目的の違いがまず挙げられる。移民や年少の学習者が多い英語，フランス語に対して，日本語の場合は留学生や学校教育レベルの外国語学習者であったり，あるいは成人の学習者が対象になることが多い。言語の説明による理解や文法概念の重要性が求められるのは当然である。また，学習形態の違いも関係がある。独習，あるいは自律的な学習を促進する場合には，参考となる資料や解説書が不可欠である。欧米系の日本語学習者は確かに「自律学習」や「問題解決による理解」といった学習方法を好むことが多い上，「文法学習」を重要だと考える人達も多いようである。これは，筆者の経験と以前英国で行なった調査(*注3)から得た印象である。さらに，本稿とも関連することであるが，日本語研究の歴史における外国人，特に日本語を〝難解〟な外国語として研究した西欧人の功績とその伝統が今日まで受け継がれていることも見逃せないのではないだろうか。

西洋人による日本語研究書の史的発展

外国人の目と耳の観察による日本語の記述は，日本語教育を実践する上で必要不可欠である。16世紀から17世紀にかけてのキリシタン宣教師による日本語研究書は，辞書［羅葡日対訳辞典（1594），日葡辞書（1603）など］，文法書［日本大文典（1604），日本小文典（1620）］，翻訳や難解な資料の解読（漢字から仮名やローマ字に翻字したもの）に至るまで，どれもが以後の国語学の発展に大きく貢献した。それどころか，これらの研究書や資料がヨーロッパの日本研究者達の手に渡り，日本語と日本文化の研究を発展させ，さらに日本語学習用の教科書を生み出していった。ヨーロッパ人による日本研究書の編纂並びに刊行がブームのように沸き起こるのは19世紀に入ってからである。世界で初めての英和辞書（語彙集）であるメドハースト（W. H. Medhurst）の"An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary, compiled from native works" (Batavia, 1830)，同じく英国人のディキンズ（F. V. Dickins）の英語・ロー

マ字版『万葉集』『百人一首』などの詩歌集（1866），オランダのクルチウス（D. Curtius）の『日本文典』（蘭語版，1857），クルチウスに協力したホフマン（J. Hoffmann）の『日本文典』（英語・蘭語版，1867），ティチング（I. Titsingh）の“Illustration of Japan”（『日本風俗図誌』，1822）や“Annales Des Empereurs Du Japon”（仏語版，Klaproth 編『日本王代一覧』，1834），フランスのランドレスとレミュザによるロドリゲスの『日本小文典』仏語版（1825），ローニー（Leon de Rosny）の“Introduction a l'etude de la langue japonaise”（仏語版日本語研究書，1854），“Texts Japonaise”(1863), “Anthologie Japonaise”（『日本詩歌集』，1871），同じくフランスのパジェス(L. Pages)の『日仏英辞書』(“Dictionaire Francais-Anglais-Japonais”, 1866)，等々の研究書が次々と刊行されていった。日本語との関連で言えば，日本語の音韻と音声，日本語文法の解説，日本語の文字と表記(ローマ字による音の併記)，そして古代から中世，近世に至る日本語の語彙（中世以降は日常生活語彙も含めて）等が含まれていた。こうした日本語・日本文化研究の中には，ヨーロッパを始め中国，韓国の文化，言語の対照研究に基づくものもあり，現代の日本語教育研究の在り方とも基本的に一致する。彼らの日本語の記述も外国語との比較（対照）が視点になっているからこそ，日本人にとっても理解がしやすいのである。同様に，異文化からの日本文化理解もまた，多くの情報と知識が求められるだけに，理解が一層深められる。上述したメドハーストの著書『英和—和英語彙集』の序文には，当時の（鎖国時代の）困難な状況下での資料入手の苦労話が次のように綴られている——“——, but having through the kindness of several gentlemen from Japan, obtained the sight of some native books, particularly in the Japanese and Chinese character combined, the author has been enabled, from his knowledge of the latter language,...”（当時バタビアに来ていた人達から日本語に関する漢字・仮名混じり書きの書物を入手することができ，漢字の知識があったことから辞書の編纂が可能であった—とある)。杉本つとむ（1989）によれば，　語彙集自体は『蘭語訳撰』（奥平昌高編，馬場佐十郎訳，1810），そして『倭語

類解』(洪舜明による日朝対訳辞書，18世紀初頭)が底本になっているという。一方，同書の音声に関する記述部分は，ロドリゲスの『日本語大文典』や『日本語小文典』を基本的な資料として，その上で英語話者としての言語感覚を加え，英語音声との比較による日本語音声の概要を述べたものと考えられる。一度の来日の体験もなく，また日本人との交流もないメドハーストであったが，彼自身の言語感覚と中国語の知識をもって古い参考資料を解読し西欧に英語を介して日本語を紹介した功績は大きい。特に，メドハースト以後，先に述べたヨーロッパ人研究者のほかに，米国のS.R.ブラウン，J.C.ヘボン，英国のサマーズ，E.サトウ，オールコック，アストン，チェンバレン等の「英語系」研究者達が明治期の前後から日本を舞台に活躍し，日本語学習書，辞書，日本文学・歴史・社会に関する翻訳書（英語）といった幅広い業績を残していったのである。

本稿は明治期に日本語の研究，および日本語学習書の編集を通じて日本語教育の発展に尽力した西欧人のうち，初めにS.R.ブラウン（Samuel Robbin Brown）の研究業績の一つである"Colloquial Japanese or Conversational Sentences and Dialogues"(*注4)（1863）を取り上げ（以下，"Colloquial Japanese"と略す)，今日の日本語教育の内容と方法における意義を考えることを目的とする。ブラウンはヘボン式ローマ字で知られるJ.C.ヘボンのよき理解者であり，特に言語の研究と教育には非凡の才能を発揮したと言われる人物である。英語との対訳による最も古い日本語会話教本として知られている。

2　明治期における日本語教本の研究——ブラウンの日本語会話教本について

明治期に刊行された日本語学習書の中で，特に実用日本語会話の習得を目的にしたものがいくつかある。その中でS.R.ブラウンによる"Colloquial Japanese"と"Mastery System"("T. Prendergast's adapted study of Japanese or English"(1878)—英国の教授法学者トーマスプレンダーガ

スト(*注5)の方法論を日本語と英語の学習に応用して著したもの)，E.サトウ（E. M. Satow）による“Kuaiwa Hen, twenty-five exercises in the Yedo Colloquial (1873)”（『会話篇』―江戸口語）は，当時のヨーロッパを中心に盛んに研究されていた外国語教授法の影響を少なからず受けているように思われる。“Mastery System”はもちろんのこと，ほかについても，短い会話文を選び，対訳を並べるといった形がとられた。こうした教授法は，「文法訳読法」から「直接法」への橋渡し的役割を果たし，19世紀半ば以降からヨーロッパの学校で用いられていた。ブラウンはヨーロッパの動きを感じてか，〝新しい〟日本語教本の開発を試みたのではないだろうか。これから具体的に教本の内容を見ていくことにする。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

“Colloquial Japanese or Conversational Sentences in English and Japanese, together with An English-Japanese Index to serve as A Vocabulary, and An Introduction on the Grammatical Structure of the Language. By S. R. Brown, A. M., Shanghai: Presbyterian Mission Press, 1863”(*注6)

著者のS.R.ブラウン（1810～1880）は米国生まれで，改革派教会の宣教師として1859年に来日した。その前の1838年にはマカオ，そして1841年には中国人のための英語教科書の編纂のためにシンガポールに行き，そこでJ.C.ヘボンと出会う。来日後はヘボンとともに神奈川県の成仏寺に入居，以後，布教活動と社会奉仕のかたわら，英語教授と聖書翻訳を精力的にこなした。2年間の帰国を除いて1879年まで日本に滞在した。ヘボンの著した辞書『和英語林集成』のローマ字は，ブラウンの知見に依るところが大きいと言われている。(*注7)

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

1）全体の構成

本書は序文（1頁)，日本語の音声とローマ字による表記（4頁)，文法の説明(62頁)，英日対訳による会話文(171頁)，対話(23頁)，補足説明，

索引，で構成されている。このうち，「会話文」と「対話」を併せた口語日本語が中心のテーマになるが，音声，文字，文法といった言語体系にも触れ，とりわけ，文法説明の内容が詳しい。初めの部分で述べたが，この「文法説明」（NOTES）の重要性は伝統的に西欧の日本語研究者達の考えとして受け継がれているようだ。本書の序文に参考資料としてロドリゲスやコリヤドの日本語文典，日葡辞書，クルチウス，ホフマン編の著作等を挙げているが，ブラウンもまた200年以上も前の先駆者達の偉業を引き継いでいることがわかる。

2）音声とローマ字表記の解説

4頁にわたって，著者の学習経験と英語話者の視点からの観察に基づいた日本語音声の特徴が書かれている。その要旨は次の通り――①英語音との対照で見る日本語の母音　②引き音（長音）のローマ字表記（aa，ii，uu，ee，oo）　③外国人に難解な音［ガ鼻濁音，ス（sz），ツ（tsz），ヒ(hi)］　④無声子音の直前の母音の無声化（**ヒ**ト，**キ**タ，ワタ**ク**シ，ヒャ**ク**キン，アサ**ク**サ，など）　⑤促音の規則性（「ツ」が［k］［sh］［p］［t］の前にくる時，「テ，タ」の前の「リ」→例：ニッポン，ケッシテ，カッパ，／アリテ―アッテ，アリタ―アッタ）　⑥二重母音の中で実際の表記と異なるもの（チガフタ→chigoota／オモフ→omoo／セウ，シャウ→sh'oo／など）　⑦清・濁・半濁音の表記　⑧アクセントの位置（型）と意味の違い［例：じしん（自身）―じしん（地震）／はな（花）―はな（鼻）／むし（蒸し）―むし（虫）／など］(*注8)また，「多音節語は語尾から二音節目がもっとも高くなる」と記している。つまり，二音節目から上がる起伏型の語の場合の下がり目のことだろうが，〝英語的発想〟の説明のような印象で興味深い。

このように，簡略ではあるが，理解しやすい外国人の発想が随所に込められている。

3）文法の解説

まず，日本語の品詞分類(parts of speech)として，Verbs(動詞)，Nouns

(名詞)，Personal and Interrogative Pronouns（人称および疑問代名詞)，Adjectives(形容詞)，Adverbs(副詞)，Conjunctions(接続詞)，Postpositions（助詞)，Interjections（間投詞)，Constructive Particles（構成助辞—*注9) を挙げている。次に，これらの品詞の用法について説明を加えているが，「動詞」を重要項目と考えたのか，ここだけで説明が25頁に及んでいる。その部分を中心に要約しながら，現在の日本語教育との関連を見ていく。

a）規則動詞と不規則動詞（Verbs Regular and Irregular）

いわゆる一段活用の動詞を "Regular Verbs"(規則動詞)，五段活用の動詞を "Irregular Verbs"（不規則動詞）としているが，現在の日本語教育の現場ではこれらをまとめて規則動詞のグループに入れることが多い。つまり，五段動詞は規則動詞 I，一段動詞は規則動詞 II，カ変(クル)／サ変(スル)動詞を不規則動詞とするのが一般的な分類である。ブラウンは "Irregular Verbs"（五段動詞）の例として，聞く，持つ，殺す，しまう，打つ，食う，習う，等を挙げ，その活用形（未来，受身，使役，否定）を一覧表にしている。さらに，注釈として，「語尾とその直前が母音の動詞(食う kuu，買う kau，など）の　活用の際に「食わぬ kuwanu」，「買おう kawoo」のように［w］が入る」とある。その他，未来形（～よう／おう）の作り方，丁寧形（～ます／まする）とその派生語形「～ましょう」について述べている。いずれも，学習者には基本的で親切な説明であろう。

b）命令形（The imperative）

不規則動詞（開ける，見る，など）には，語幹に「よ」「ろ」を付加し，規則動詞（行く，歩く，など）は「行け」「歩け」の形に「よ」を加える，とある。現在では「終助詞」の「よ」は命令文だけでなく陳述の文にも添えられるが，「見よ，締めよ，せよ，こよ」のような古語（文語）の用法から，命令形の一部として「よ」を捉えたようである。

c）連用修飾形（Gerundives）

"Gerundives" はラテン文法の「動詞性形容詞」に相当する語だが，日本語では「連用修飾」の形，いわゆる「て形」と「連用形の語幹」のことを

指す。「～て形」については　次のような説明を加えている…「歩き」が「歩きて」から［k］の脱落で「歩いて」になる。「読みて」が「読んで」，「結びて」が「結んで」，「ありて」が「あって」，「立ちて」が「立って」，「おりて」が「おって」のような音変化を伴う…このような「～て」の音便化は学習者にとって難しい学習内容の一つである。また，現在と異なる活用の例を挙げているが，それは，いわゆる母音連続の語(思う，会う，笑う，など)の「て形」である。著者は，"omoote"，"oote"，"waroote"になる，と述べている。その他，動詞の「て形」のほかに「名詞＋で」で同様に連用修飾の形をとることも触れている。例えば，「手前で～する」「……と申す木でつくられた」「どこ（何／いつ）で？」等を挙げ，デの意味を「手段」「原因」「材料」「道具」等と説明している。日本語教育では，初級段階では動詞と名詞の連用修飾の用法を切り離して教えることが多いが，上に例示された文法の説明内容は今日のものと大いに共通するところがある。

d）接続形（The Conjunctive Form）

ブラウンは，いわゆる英語のwhen，if，asなどの接続詞に相当するものとして「ば」の接続方法を説明している。動詞の連用語幹の［i］を［e］に代えて接続形の「ニハ」を付け音便規則により「バ」と発音する（例：tatsu～tate-niwa～tateba／naru～nare-niwa～nareba／など）とある。また，時には接続形（連体形）が"～uru"，"eru"，"iru"で終わる不規則動詞（五段動詞を含めて）も一段動詞と同じように表すことを加えている―例：tatszru（立つる）―tatszreba／suru（する）―sureba／madzru（混ずる）―madzreba／などのように。

e）仮定（条件）形（The Conditional form）

ここでも著者は「ば」接続の文を「仮定形」として提示するが，「仮定形」の場合は，yuki（行き）の未来形"yukan"を導き，そこに"niwa"を付けて"yukaba"とする，とある。同様に，"nari"(なり)の未来形"naran"から"naraba"をつくり，仮定（条件）の意味（"If one is to go"「もし行くとなれば」のような）になると述べている。

最後に，ブラウンはこの「ば」についてホフマンの鋭い文法分析能力を

賞賛している。それは，日本人教師が同じだと主張するという「行けば」と「行かば」の違いをホフマンが的確に指摘したということであるが，一般の日本人であれば違いに気がつかないのも無理はないと思われる。というのも，文語としては仮定条件の“～aba”と既定条件の“～eba”が区別されて使われていても，もともと日常の話し言葉にはそれらの区別がなかったわけであるから。ホフマンもブラウンも話し言葉だけでなく，古い文字資料からの文法の解明に努めたことがわかる。なお，杉本つとむ（1989）に，幕末の日本の国語研究家もそれより以前の1844年刊行の書に「ば」の意味の用法の研究を発表していた(*注11)とあるが，それにしても，外国人のホフマンやブラウンの観察力の鋭さには敬意を表したい。このような視点が日本語教育の原点であることは言うまでもない。

f）譲歩形（The Concessive form）

英語の“though”，“although”，“for as much as”等に相当する日本語として，「も」または「とも」を挙げ，動詞＋ハ，バの意味に対立する用法を次のように示している…「聞きハ」→「聞く（ト）モ」／「見るハ」→「見る（ト）モ」／「聞くニハ」→「聞く（ト）モ」／「聞いてハ」→「聞いてモ」／「見てハ」→「見てモ」／「聞けバ」（＝聞きニハ）→「聞けドモ」（＝聞けニトモ）また，“domo”の代わりに“iyedomo”（「言フ」→「言へドモ」）が用いられること，その際に助詞の「ト」が直前にくるところから，「（彼らは行く）ト言う」を示し，それに対する譲歩的な文「（彼らは行く）ト言えども」について言及している。そして，この場合，条件になる事柄が現在のことであって未来のことではない，つまり，仮定条件でなく純粋に譲歩の意味をもつと強調している。ここでも前項の“～eba”（已然形接続のバ）と同様，「～も，とも（ども），言えども」等「譲歩形」の用法を確定条件のみに限定し，文語の文法を重視していることがわかる。(*注12)

g）肯定の過去形（The Past Tense Form Affirmative）

日本語の過去時制は動詞の語幹に“ta”を付して表されるが，“ta”は［te＋ari～tari］になり“ri”が脱落してできたものであるということをホフマンの業績とともに紹介している。

「あり」→「あって＋あり」→「あった（り）」
「ありまし」→「ありまして＋あり」→「ありました（り）」
「ござりまし」→「ござりまして＋あり」→「ござりました（り）」

の三者はすべて「存在（所有）した」という共通する意味をもち，漢字の「有」という字で表す，とある。ここで特に口語会話との関連で述べるのが，丁寧体「～ました」と日常体の「～た」との使い分けである。本文の会話文では，丁寧な表現と，親しい，あるいは身分の低い者に対する表現を対比させていることから，解説を加えたのであろう。例として，「着いた」→「着きなされました(*注13)」，「行った」「おいでなされました」，「置いた」→「お置きなされました」等の本文中に見られる表現を紹介している。説明の最後の頁に "Table showing the Formation of the Past tense of Affirmative Verbs" と書かれた動詞の過去時制一覧表があるが，一段動詞と五段動詞の並べ方が揃っていなかったり，活用の誤り（"ke-ru"（蹴）→ "kete" → "keta"）があったり，「飲み込み」「生き返り」「乗り渡り」などの複合動詞が含まれたりするなど，学習用としては混乱を招く恐れがあるように感じられた。もう少し動詞の種類と配列に配慮が向けられると理解しやすいものになろう。しかし，「～て」から「～てあり」，「～た」（「ました」）の流れは音声的にも意味的にも理解がしやすいと思われる。動詞の時制とアスペクトの研究が盛んになった現在では，初級レベルで動詞の「ます（連用形）」，「終止／連体形」，「た形（過去，完了）」，を教えた後にアスペクト表現（「～ている」「～てある」「～てしまう」など）を学習するようになっている。活用形と意味の十分な理解が得られないと日本語の習得にブレーキがかかってしまう。その意味で，動詞の「て」「た」形の指導には工夫が求められる。

h）過去進行形（The Past Continuative Form）

英語の "While I was reading a book yesterday,..." という文の "was reading" に相当する日本語を「て＋い／おり（ました）」で示すとある。過去の動作がある時点で継続している状態を指すのであるが，そのことを英語では "imperfect tense"（未完了時制）と考えるようだ（ブラウンの記述

から)。それについて，ホフマンは日本語の動詞には“imperfect tense”がないと言い，ブラウンは「～ておりました」という表現があると言って反論している。どちらにしても，英語の文法における時制の考えを，そのまま日本語に適用しようとするのは無理があった。さらに,「飲んでおりました」「聞いておりました」をそれぞれ“was drinking”，“was hearing”と訳すのは適当だが,「行っておりました」「参っておりました」にも“was going”，“was coming (or going)”と自動的に同様の訳を与えてしまっている。

i）可能形（The Potential Form）

この項も，ブラウンは英語の文法範疇を基本にして日本語を考えているようだ。つまり,「(雨が降っております)かと思う」「降っておりましょう」「昨日お目にかかったろう」「明日船に乗りましょうかと思います」等の「確実性（蓋然性)」を話題にして日本語の「可能形」を探ろうとしている。英語では，“can”，“may”，“must”といった法助動詞が可能性や確実性を表すところから，それらの意味に相当する日本語表現を並べたものと思われる。次に，動詞の語幹に“e”，“eru”を付けて表す「可能形」の用法，そして，受身形との形の類似性についてのブラウンの考えを述べている。さらに，受身と可能は文脈から判断できるとして,「あの人は山**へ**登られる」の「**登られる**」を助詞の「へ」の存在から「自動詞」と決め，自動詞は（受身形でなく）可能形であると言い切っている。

j）願望を表す形（Desiderative Form of the Verb）

ここで用いられている英語の“desiderative”は「強い要望，願望」という意味のようだが，確かに，ブラウンはここで「～たい」あるいは「～とう（ございます)」を示し，それぞれの用法についても述べている。

k）受身形（Passive Form of Verbs）

ブラウンは受身を三種類に分類するが，受身と自発と可能が混在していてよくわかりにくい—①第一種の受身は「エ」段接続のもの…例：読み—読める／折り—折れる／作り—作れる／など。可能と受身の意味があるとしている。(*注14) ②第二種は「見える，煮える，聞こえる」といった自発的な受

身。③第三種はほとんどの他動詞に"areru"を接続させてつくる受身。受身はあくまで他動詞であることを強調している……②と③は理解しやすいが，①については，例文と説明が必ずしも一致しない。例えば，「折れる竹」と「作れる（ます）反物」であるが，英訳の"a bamboo that is bent and is likely to break"と"manufactured cloths"からもわかるように，「折れる」は自発で（自然にそうなる），「つくれる」は可能のほかに「誰かによって**作られる**(*注15)」受身の意味で両者は異なる。しかも，③と①の受身の区別が曖昧なのも残念である。

その他の文法項目

さらに様々な文法項目の解説が続くが，これ以降の文法事項はまとめて書くことにする。まず，7頁にわたる動詞の**否定形，否定表現についての説明**がある。要約すると次の通り…①動詞の否定形（現在）：連用語幹に「～ませぬ」を接続。②否定の命令形：連体形に「ナ」を加え，「するナ，たたくナ，なさるナ」などとなる。丁寧語としては，連用語幹に「なさるな」か「なさいますな」を付して用いる。③否定の過去形：否定語幹に"nanda"または，丁寧さを表す"mashi"を加え，それに"nanda"を付ける…"ts' kenanda""ts' kemashinanda"／"mayowananda""mayoimashinanda"／"yurusananda""yurushimashinanda"／など。会話では，"naku+atta"からつくられた"nakatta"を否定語幹に接続させて"denakatta"，"tsukenakatta"，"tobanakatta"などがよく用いられる，とある。④否定の未来形：動詞の連体形（規則動詞は"ru"を除く）に否定の助動詞"mai"（"maji"からの変化）を付けて表す…"narumai""narimasumai"／"arumai""arimasumai"／"mimai""mimasumai"／"sememai""sememasumai"／など。⑤否定の連用修飾形：都方言では否定の語幹に"de"又は"ide"を付けて表すが，江戸方言では"～naide"又は"～zuni"が使われると述べている。⑥否定の接続形："eba"を動詞の否定語幹と結合させて"～aneba"をつくる。過去の形である，否定語幹に"katta"と"araba"の組み合わせでつくる"～nakattara"もある。つまり，"de-

kineba”, “dekidzuwa”, “dekinakereba” と同じ意味で “dekinakattaraba” が使われるということを述べている。⑦否定の条件（仮定）形：文語では否定の連用修飾形 “de” に “wa” を付けて，“nomadewa”, “toradewa”, “midewa” のようになるが，江戸口語では “nomanakereba”, “toranakereba”, “minakereba” とか，“nomanu naraba”, “toranu naraba”, “miru naraba”, あるいは，“nomimaseneba”, “torimaseneba”, “mimaseneba” 等のように使われている，とある。また，「ならば」は「なり」の仮定形，「なければ」は否定接辞の「な」に動詞「けり」の仮定形が結合したものである，「けり」は単独で用いられないが，「けれども」のように他の語との結びつきで使われる，といった説明を加えている。⑧否定の譲歩形：文語では “minedomo”, “kikanedomo”, “～to iyedomo” のように “tomo” か “domo” を付けて表す。口語では “Ano hito ga kimasenu to iutomo.....” （あの人が来ませぬと言うとも……）という表現も可能であると補足している。

次に，**日本語の動詞の形態**を分類するが，英語やラテン語の文法規範を基礎に日本語の動詞分類を試みているためか，日本語文法にあまりそぐわない用語が多く現われてわかりにくいのが残念である。日本語の動詞を次の七つの “mode” に分類している：“the indicative” （直説法），“the subjunctive” （接続法），“the concessive” （譲歩），“the conditional” （条件／仮定法），“the potential” （可能法），“the imperative” （命令法），“the participial” （不定詞，分詞，動名詞を含めての分詞とある）さらに，それぞれに時制に分けて動詞形の変化表を付けている。日本語に適用できないものも含まれているが，それらについては**注釈で説明**を加えている。その中で興味深いと思われた点について紹介したい…「条件法」と「接続法」の活用形については，それらが同じ場合であっても，前者には「もし」という語が付加されるので区別ができるとしている。また，ポルトガル人の文法学者達が “infinitives” （不定詞）としてコトを含む句（例：“miru koto”, “mita koto”）を捉えていることにブラウンは反論している。ただ，「むさぼりとるコトは～でござります」（No.144）と「からだを動かす（こ

と）は～でございます」（No.145）という構造の似た文を取り上げ，後者の場合については直接目的語をとり且つ文の主語になっているから「不定詞」である，というのも説得力に欠けるように思える。さらに，ロドリゲスとコリヤドが"miru to"を不定詞としたことを挙げ，不定詞でなく接続詞であると強調している。これらの論議は，ブラウンも述べているように，英語の訳では不定詞と思われても，日本語の構文では接続法（と）や連用修飾形＋「は」（ては）で表されることもあり，必ずしも対応しないことから生まれている。しかし，現在でも指導の難しい「コト」を文法項目として取り上げ，説明の上にいくつかの会話文の用例まで示すという考え方から，ブラウンの言語教育者としての高い資質を感じる。

日本語の名詞の特徴については，"constructive particles"（構成助辞）とブラウンが呼ぶ「ハ，ガ，ヲ」との関係から述べている。まず，ハとガの違いの難しさを指摘するが，ハはそれに続く語や節を切り離す役目の助詞であり，主部と述部の間に置かれたとしても主格を表すものではない，と断言している。主格の指標でない根拠として例を挙げるのは，（No.724）"kataki ni suru mono wo ba, anata kore wo kawaigare"（仇にする者をば，あなたこれを可愛がれ）という文であるが，「をば」（＝「をは」の濁音）は，動詞「可愛がれ」の直接目的語「これを」と同格である，「をば」の直前の句（仇にする者）を後続の語群から引き離す役割を担っていると説明する。同様の例として，（No.754）"Mina warui koto no uchi de wa"（＝Of all bad things）を挙げ，「ハ」が"in regard to"［～について（言えば）］のような，他の語句から独立させる意味合いを持つと述べている。ここまで明確に意味を分析しながらも，「翻訳が難しい」とか「ハとガの違いは訳すよりも話し手の声のトーンで区別できる」とも考えているようだ。「ハ」と「ガ」は他から際立たせるという意味で似ているが，「が」の方が（そのことを）強調する時に使われるという。例として，"Ichidora ga (No. 3)"（１ドルが）を挙げ，その部分を強調するとしている。ガとハの違いの例としては，"Here are the musters"（見本ハあります）と"The muster of Uji suits me"（宇治の見本ガ気に入ります）を示し，上述の説明を補足

している。(例はDialogueIの会話6,9より)

次に,**「ノ」を所有格または属格の助詞**として用例とともに説明している。「赤金ノ出るところ」(No.2)を"Copper's issuing place"と直訳し,「所有」の意味を強調しているが,その場合の最適な例文と言えるかは疑問である。しかし,すぐ後でノとガが同じ意味(目的)で使われると述べ,例として,No.735の"Watashi ga kimono"("My clothes"という意味で,"Watashi no kimono"と同じとある)を示している。本文中には,"Anata no kodomoshiu wa... (No.11)"(あなたの子供衆は……)や"Hoka no fune ga tsukimashita (No.6)"(他の舟が着きました)のような二つの名詞をつなぐ「ノ」の例が多く含まれている。こちらの方が「所有」の意味を表す用例としてはわかりやすい。**「ヲ」については**,直接目的語の後に置かれる,動詞は目的語を取るゆえに他動詞である,しかし英語では一般にそうであっても日本語では時には「ハ」や「ガ」に取り代わってしまうことがある,と述べている。つまり,No.970の例文"Are no suru koto wa mireba,..."(あれのすることハ見れば)の「ハ」,"Washi wa sono ri ga wakaranu (No.456)"(わしはその理ガわからぬ)の「ガ」は,いずれも直接目的語に続く「ヲ」の役割を担うと指摘している。その点からも,ブラウンは「ハ」と「ガ」は本質的には「格の指標」ではないと考えていたようだ。

ブラウンは英語との対照的視点もあってか,**日本語の数の概念と名詞の性**についても触れている。人々,国々,色々などと語を重ねても「数が多い」のではなく「様々な」という意味が込められることや,接辞の「達,ども,方,衆」などが敬意の度合いによる使い分けをする,とある。日本語の名詞には基本的に性がないが,男女差を示す接辞の例(牡牛　オウシ・雌牛　メウシ/雄鶏　オンドリ・雌鶏　メンドリ)を紹介している。

英語との対照から**「代名詞」と「関係代名詞」**の説明も興味深い。前者については,特に「場所の副詞」として示した「ワ,ア,カ,コ,ソ,ド(ダ)」系の代名詞,後者は,名詞の修飾句(節)の日英語における違いを説明している。特に,日本語では「レ」を伴って人称代名詞(ワレ,カレ,

など)や指示代名詞(コレ，ソレ，アレ，など)になり，「コノ，ソノ，……」のように名詞を修飾するという説明がある。ブラウンは，本文の中でも指示語を積極的に使っているようである。例えば，"Kore wo motte kaere (No.56)"（コレを持って帰れ)，"Kono tegami wo—sama e motte yuke (No.57)"（コノ手紙を～様に持って行け)，"Sono kago no tamago wo kazoete gorannasare(No.76)"（ソノ篭の玉子を数えてご覧なされ)，"Ano kago no tamago wo kazoete miro（同）"（アノ篭の玉子を数えて見ろ）等の例文が見られる。そこには，「ソ」と「ア」を同じ意味で敬意の差と捉えているものもある。また，"Does he live there still?" を日本語で "Ano o kata wa mada asoko ni szmatte oide nasaremasu ka?"（No.105）と "Ano hito wa mada asoko ni szmatte iru ka?"（同）のように表しているが，ほかにも日英語の違いを示す例文が本文にある。日本語の指示代名詞，接続詞，副詞に多用される「コ，ソ，ア」の用法は基本的かつ重要な学習項目の一つで，ブラウンもそのことを認識していたと思われる。「関係代名詞」は英語では名詞の修飾句をつなぐ役目をもつが，日本語にはそれがない代わりに名詞の前に形容詞や修飾句が置かれると述べ，例として，コト，ヒト，トコロといった名詞を限定する形容詞句を示している：「するコト，するヒト，私の知るトコロ，お前の言うトコロ……」など。

次に，**「形容詞」**であるが，元来日本語の形容詞を，名詞に続く形が「キ」と「ナ」の二種類としている。ブラウンは，"ki"（キ）は "k" と "i" の組み合わせで，" i "（=to be)，つまり「いる／状態」を意味するというホフマンの説を支持するという。しかも，"na" も "naru"（to be）からの派生であるから，結局，キもナも同じ意味機能をもつと述べている。「高キ(イ)，寒キ（イ)，熱キ（イ)」などのいわゆるク活用を，ブラウンは「キ」形容詞，「確かナリ，明らかナリ」などのナリ活用の形容動詞を「ナ」形容詞と分類したわけで，この点は現在の日本語教育もその流れを受け継いでいる。ブラウンは日本語の形容詞の特徴をいくつか挙げている…①文の述語として "Kono shikata wa yasashii"（No.997）のように "i" または "ki" で文を終わらせる。英語と違って be 動詞のような繋辞はとらない。 ②形容詞

自体が動詞のように活用する（ロドリゲスが形容詞の陳述の形を“adjective verbs”（形容動詞）と呼んでいたのはこのためではないかと推測している)。③形容詞に動詞が接続する時には“～ku”という形をとる：“Waruku natta”（悪くなった)／“Osoku mairimashita”（遅く参りました)／“hayaku (＝hayau＝hayoo) gozarimasu”（(お）はようございます)／など。④その他，文語的なキの名詞的用法（“Furuki wo sutete～”古きを捨てて～)，「サ」を付して抽象名詞にする用法（長さ，広さ，寒さ，など)，さらに，漢語名詞の形容詞的用法（ノで接続）などについて説明している。

形容詞の比較級については，「～ハ～より……ダ」の形をはじめ，英語の“as”に対応する「ホド」や「ヨウニ（比況)」，最上級として「いちばん」，そして「非常に」という意味の副詞「イタッテ，ハナハダ，マ（まこと，まさしき／から)」等を挙げている。

ブラウンは単複数の概念とそれに関連する語彙を前項で挙げたが，**数字全般および助数詞**についてもかなり詳述している。「十」以外は現在あまり耳にしなくなった，和語系の十から二十(too, too-amari-h'to, too-amari-f'ta, too-amari-mi,..., hatachi)，三十（mi-soji)，四十（yo-soji)，……九十(kokono-soji)，百（momo)，千（chi)，(一）万（yorodz）は，今日の初級日本語教科書には出てこない。しかし，助数詞についてはブラウンも力を入れるように，日本語の数量表現の中核的な存在であり，今日の日本語教育における主要な指導項目の一つになっている。数，時間，年月等の表し方を詳細に記述するのは，学習者としての自身の経験から，数字の読み分け（和語系，漢語系語彙の読みの区別）に難しさを感じたからであろうか。

副詞についても詳しい記述がある。基礎となった文法の枠組みは，やはり英文法その他の西洋文典と見られるが，「副詞」に相当する日本語を取り上げ分析を試みている。ブラウンによる分類は次の通り：①「真マ」「今日キョウ」など単独で用いられるもの（“primitive adverbs”）②形容詞の語尾“i”を“ku”にするもの（早い―早く／など）③動詞から派生した複合語（例：たちまち）④形容詞(*注16)＋名詞（例：ちょうど）⑤動詞（語幹)＋名

詞(例：いま＝present interval＝now)⑥名詞(または代名詞)＋助詞(例：あとで，それで，そこで)⑦副詞＋形容詞(語幹)（例：もはや)⑧形容詞＋ニ（例：大きニ）⑨指示形容詞＋名詞（例：こんにち）⑩複合語（何べんでも，どうでも）⑪動詞のテ形"gerundives"（例：差し当たって，さだめて，はじめて，書いて(口頭ではなく書面で)，など)……明らかに国文法の枠組みから外れているとしても，このような分類方法は「外国語」として日本語を見る視点から生まれるわけで，意味や機能の分析にはわかりやすい面もある。さらに，ブラウン以降に現われるイギリス系の日本語研究者達が国語文法学者と平行して日本語文法の体系化に努めていったことを考えると，ブラウンの果たした役割は大きいと言える。このほかの副詞の分類として，英語の疑問文への答えに対応する副詞表現を日本語に適用している：1）"When～"や"How often～"に答えるもの（「時間」を示す—いま，ただいま，まだ，すぐに，さきほど，これから……）　2）"Where～"，"Whence"に答えるもの(「場所」を示す—あそこへ，ここに，うちに，どこでも……)　3）"How often～"に答えるもの（「数・頻度」を示す—また，しばしば，一度，まれに）　4）"How much～"に答えるもの(「程度」を示す—はなはだ，あまり，大体，概して……など)　5）その他「様態」の副詞（よく，早く，静かに，さっそく，やわらかに）…こうした英語系の文法の枠組みで日本語の「副詞」を記述するのは難しい面もあろうが，意味と機能の明確化という点では，上の①～⑪よりも1）～5）の分類がわかりやすい。副詞的表現の機能を「時，頻度，場所，程度，様態……」という分類で考えるのは，今日の日本語教育でもよく見られることである。

ブラウンは前項で示したようにハ，ガ，ノ(*注17)を構成助辞(constructive particles）と呼び，それらとは別に，ニ，デ，カラ，ノ（主として属格)，ト，へ等を後置詞（postpositions）として扱っている。後置詞は英語の前置詞と同様に，格の関係を表すものと捉えているが，同時に，次のように述べて他の視点からも考察していることを示唆している："Postpositions are from words which express only the relations of things either external or internal to the human mind."（下線部は筆者による）つま

り，後置詞は，人間の心と事物の「外的」あるいは「内的」関係のみを表現する言葉であるという。これは，助詞自体は文中の格の指示(外的関係)と話し手の心的態度（内的関係）を表す機能をもつということであろうか。この点について，江戸時代の国学研究者である鈴木朗の「テニヲハ論」(*注18)の中に書かれた内容〔「……テニヲハハ其ノ詞(名詞,動詞,形容詞を指す―筆者）ニツケル心ノ声ナリ」〕との共通性，つまり，助詞を名詞の付属語としてだけでなく，形容詞や動詞などと結びついた副詞や感動詞までも含めて捉えているところが見られる。ブラウンがこのことを意識していたかは不明であるが，助詞（後置詞）を単純後置詞と複合または派生後置詞の二種に分け，前者の例として，「ニ，デ，ト，ノ，へ，カラ，マデ，ヨリ」，後者の例として「ニテ，（位置を示す語）＋ニ，（動詞語幹）＋テ」などの「副詞相当語句」を挙げている。

最後に**「接続詞」**の項の説明を要約したい。まず，等位接続と従属接続に二分し，それらをさらに細かく下位分類している。等位接続表現として挙げるのは次の通り：①連結接続詞(“Copulative conjunctions”)…“and, both-and, neither-nor” などに相当する語句(～と，～も，～も……ない) ②反意接続詞（“Adversative conjunctions”）…“but, but yet, nevertheless, notwithstanding” などに当たる語(けれども，なれども)。動詞の「譲歩形」“～edomo” を用いて接続も可能とある。③離接的接続詞（“Disjunctive conjunctions”）…「あるいは」という語，加えて「カ」が繰り返し用いられる場合：例）“Michishiwo ka, h’ki shiwo ka?”（満ち潮<u>か</u>引き潮<u>か</u>）④原因を示す接続詞（“Causal conjunctions”）…原因，理由を示す接続詞として「から，ゆえ，ゆえに，によって」と推論接続詞（“Illative conjunctions”）として「そうしてから，それだから，これによって，それによって，それから，そこで」などを挙げている。もう一方の従属接続詞は主たる命題（主文）に従属する命題（従属文）の，主文との関係を示す接続詞であるとし，いくつかの下位分類を行っている：①そのまま抽象的な考えを主文につなぐ働きの「ト」や「かもしれません」の「カ」：例）“Ano h’to wa shinimash’ta <u>to</u> omoimas”（あの人は死にましたト思います），

"—fune ni norimash'te itta ka mo shiremasen"（～舟に乗りましたって言ったカもしれません）など。②時に関する従属接続詞…「～とき」「～てから」「～うちに」「～まえに」「～まで」「～より（=since～）」など。例文として挙がっているものの中に，"Yedo ni orimash'ta uchi ni, kaji nga arimash'ta"（江戸に居りましたうちに火事がありました）とか"Watak'shi wa mairanu mai ni, shingoto wo sh'te shimaimash'oo"（私は参らぬまえに仕事をしてしまいましょう）といった不自然な用例も含まれている。③場所に関する従属接続詞…「（あなたの—する）ところで～」の「ところで」のほか，英語の間接疑問文の疑問詞に相当する「どこへ」「どこから」「どこへ～も」なども含めている："Doko e ikimash'ta ka shiranu" (I don't know where he has gone.)／"Doko e okimash'te mo kamaimasen"（It is immaterial where you put it.）④様態，比況（Manner）の従属接続詞…「（あなたの教える）とおりに」「（病気の）ように」など。「ように」は"so that"の意味もあるとし，"H'tobito no osoreru yoo ni okonaimash'ta"（人々の恐れるように行いました）の例文を示している。⑤因果関係を示す従属接続詞…原因を示す「から」，反意または譲歩を表す「も」あるいは「ども」，理由や目的の「ために」，可能性を示す「もし～なら」「もし～ないと—」（"if"，"unless"に相当するもの）など。⑥強調する意味をもつ従属接続詞（Subordinative conjunctions of Intensity）…英語の"as～as"，"than"，"The—，the～"に相当するもの：「と同じような」「～より」「（多い）ほど（よい）」などを挙げている。このように，英語の文法を基準に日本語の「接続詞」を規定していることから理解しにくい部分もあるが，英語と日本語の対照言語分析の先駆けであることと，こうした労作により今日の英語による日本語文法解説書の発展があることを思うと，ブラウンの功績の大きさを改めて実感する。

4）会話文及び対話文

会話文は1～172頁まで，次いで対話文（Dialogues）が173～196頁までの23頁に盛り込まれている。会話文の小見出しに"Sentences in English

and Japanese Colloquial" とある通り，英語文がまず提示され，その下に日本語の丁寧体と日常体の表現がセットになって示されるという形式である。一つの英語文に対して日本語の話し言葉にはバリエーションがあるということを，ブラウンは最も読者に伝えたかったのだろうか。この会話文の特徴は，文体の種類や敬語表現の多さであろう。一読すれば，文法や語彙よりも話し言葉の待遇表現の習得に重きが置かれているとの印象を受ける。また，全体的に，英語を基礎としてその対訳を日本語で表しているところから，日英語の表現の違い，発想の違いを探る面白さもある。さらに，現代日本語との大きな違いもこれまでの研究者により指摘されたところで，江戸時代の話し言葉を知る貴重な資料であることは間違いない。一方で，日本語学習書として，あるいは教科書として適当な教材になるのかという視点で見ていくと，いくつか問題点もあろうかと思われる。これから，本書の内容を少し詳しく見ていくことにする。

会話文の構成と特徴

上でも触れたが，本書を日本語学習のための教科書として見ると，使いにくい面が多いことに気づく。それは，本書の目的と対象者の特定を著者がどのように考えていたかとも関連する。外国人を対象に日本語の習得を意図したものだったのか，日本人の話し言葉の実態を観察し，それを会話集という形でまとめただけなのか，独習用の参考書なのか，あるいは教室で使用されたことがあるのか等々，については推測の域を脱しないが，本書の構成と内容からある程度は著者の狙いが読み取れるのではないかと思う。

まず，外国人の日本語学習書なのかという点については，日本語の音声や文法の解説を伴っている以上当然と考えられるわけだが，本書の学習内容（すべて会話文）の配列が文法や語彙のレベルとは全く関係なく行なわれているところが気になるのである。日本語の会話文はすべて英語文の頭文字ＡからＹの見出しに合わせて，対訳の形で並んでいる。恐らく，先に日本語を収集し，それらに英語で対訳をつけたものをアルファベット順に

再編集し直したものと推測する。しかし，単に英語表現の対訳として付けた日本語（ブラウンや彼の身近にいた日本人らの知識を集めて）も含まれている可能性も否定できない。結局，日本語の文法要素や語彙のレベルと習得のタイミングを中心に編集されていないので，日本語学習書というよりは参考書「対訳英日会話集」という印象を持たれてしまう。しかし，よく内容を読んでいくと，日本語の学習書らしいところも随所に見られる。例えば，課（A～Yに分けられた）によって「命令（依頼）表現」「推量や可能性の度合いの表現」「指示表現」等がまとまって学習できるところがある。アルファベット順に並べた結果，"back，be，begin，bring，brush，burn，buy"等，動詞語彙の多い**(B)項**では，ほとんどが動詞から始まる文，つまり，命令(依頼)文となっている。同様の傾向が，**C**(call，carry，come，comb，count，など)，**G**(get，go，give，など)，**P**(putをはじめ，pull，pass，など)，**S**（save，say，seat，stand，send，など）の項目に見られる。最も多くの日本語文を集めた**(I)項**では"I"から始まる英文が173文，対訳の日本語文がその2倍（丁寧体―ワタクシ／日常体―ワシ，の二通りずつ）の340以上の文が並んでいる。同じI項の"It"で始まる英文も71種類と多いが，その日本語訳は構文的に揃っていない。"It makes no difference to me..."（No.620）は「…私ニカマヒハゴザリマセヌ」で，"It will do very well as it is..."（No.623）は「ソレデモウヨロシウゴザリマス」のように，自然な日本語で表し，英語との表現方法の違いを示している。また，英語では多用される代名詞の"he"から始まる英文を見ると，**H項**にある218種類の文中，三分の二に当たる145文が"He～"構文になっている。日本語文はその2倍あるわけで，「アノ（オカタ，カタ，ヒト，コ），アレ」などの「指示代名詞」が使われている。H項にはこの他，"How"構文（"How～"，"How much～"，"How many～"，"How long～"など）も41文集められており，それらに相当する日本語（ナニ，ナニホド，イクツ，イツマデ，など）の文が多様な形で並んでいる。この他，英語の見出しで多いのが"**This～**"（70種類），"**That～**"（46種類）であるが，その訳文の日本語が興味深い。例えば，"That is right."（No.894）を

「ソレガホントウダ／ソレガマコトデゴザリマス」と，丁寧体，日常体ともに「ソレ」を用いているのに対し，“That is very useful.”（No.904）は「ソレハオホキニヤクニタチマスル」と「アレハタントヤクニタツ」の二種類の指示詞を丁寧な文と日常的な文で使い分けている。いずれも「文脈指示語」であり，状況によってはどちらも使われるが，ブラウンは他にも同様の例を示している（例：“That is the custom”（No.905）…「ソレハサホウでゴザリマス」「アレハサホウダ」）ところから，「ソレ」と「アレ」を敬意の差によっても使い分けようとしたことがわかる。“This”の訳語は「コレ」か「コノ」のみであるが，約140種類の「コ」で始まる日本語文が並んでいる。疑問詞“What”, “When”, “Where”, “Who”, “Whose”, “Which”を集める**W項**も学習内容がまとまっているところであろう。しかし，同じ“What”でも，“What is the difference between this and that?”(No.1112)は「ドコガチガイマスカ」，“What shall I do ...?”（No.1114）は「イカガ（ドウ）イタシマシャウ（シヨウ）カ」，“What are you doing nowadays?”(No.1119）は「コノゴロナニヲナサリマスカ」というように，ここでも型に囚われない自然な日本語を表現している。最後に，本書の最後の項目，**Y項**について述べたい。ここでは，“You”で始まる英文のみを集めているが，指示，命令，依頼，禁止，許可，義務などの意味が込められた文が多い。英語の法助動詞である“may, can, must, ought, will, shall”などを含む文が多く提示されているため，日本語文も「～ナサレマスナ／スルナ」(must not do／ought not to do)，「～スルガヨロシウゴザリマス／スルガイイ」(may～／ought to)など，英語よりも優しい表現になっているが，「禁止」や「許可」の文が多く集められている。

全体的に見ると，文法的には「命令文（依頼）」と「疑問文」が多いのが目につく。　また，英語に日本語の対訳をつけた形になっているが，日本語が英語に関係なく極めて自然な表現であることから，収集した日本語に合わせて英語を付けたと考えるべきであろう。これまで述べてきたように，文法や語彙の難易度を配慮して日本語文の配列を考えるという方針は，ブラウンにはなかったと思われる。むしろ，自然な日本語を集めて日本語表

現の待遇性，語彙の使い分けなどが理解されることを狙っていたのであろう。この会話集を教科書として活用できるのは，中・上級学習者ということになる。基本的な学習を終えた後でこなれた日本語の会話に慣れる目的であれば，指導内容やその配列等をあまり気にする必要はない。ブラウン自身も日本語の読み書きはもちろん，会話能力も中級レベル以上に達していたと推測するが，独習と文法学習を好み，しかもある程度の日本語の知識のある人達には，有用な教科書として喜ばれたに違いない。

対話文の構成と特徴

対話文(Dialogues)は，I，II，III，IV，V，VI，VIIの7種類に分かれているが，どの対話にも共通したテーマは「絹や茶の売買，金の貸し借り」あるいは「商人と武家またはそれに相当する身分の人との会話」ということであろうか。具体的には，第一課「茶を買う」，第二課「絹商人と外国人」，第三課「外国への船積み」，第四課「絹を買う」，第五課「主人と奉公人」，第六課「両替」，第七課「漆器を買う」というように，すべて「商売」と「外国人と日本人」がテーマになっていると言ってもよい。対話は「日本人Natives」と「外国人Foreigners」のやりとりにより展開される。特に，日本人は「商人」として登場し，外国人は比較的身分の高い人物として描かれているようで，「モシモシ，オハナシモウシタイコトガアル」というのが「外国人」の言葉で，「ハイ，ナニノゴヨウガゴザリマスカ」と丁寧語を相手に使っているのが「日本人(商人)」になっているところが面白い。また，第二課では，外国人に絹を売りに来た日本人商人が，一度断られたが自分の経済的窮状を訴え，経済的に余裕のある外国人に同情され商品を買ってもらい，さらに支払い条件も有利に進めてもらうという話になっている。当時，教養も経済力もある外国人と，厳しい商売をして苦労した日本人の実態と重なるところがあって興味深い。全体的に，丁寧な日本語が多いのが印象的で，ある程度の身分の高い人達の日本語を観察する機会に恵まれたのであろう。また，外国人が上品な格調の高い日本語を使っているのも日本人からすると好ましいことであり，ブラウンはそのことを経験などか

ら熟知していたものと思われる。対話文についても，英語文が先で，日本語文が続いている。

3　ま　と　め

S.R. ブラウンの "Colloquial Japanese" は江戸時代の終わりに刊行された書であり，これまでに多くの国語学，英語学関係者により「江戸の話し言葉研究」の資料として取り上げられた。しかし，今回のように，日本語学習の教本として内容を見つめ，日本語教育に果たした役割を考えることはこれまでにあまりなされなかった。現在では，多くの教科書も文法解説書もあり，しかも日本語教師の多くが「英語で」日本語の文法を説明できる時代である。文法解説書の役割や意義を改めて考えることもなくなってしまっている。これから明治期に日本語研究書や教本を体系化していった西欧人，特に，メドハースト，ホフマン，ブラウンの影響を受け，彼らの研究を引き継いでいく英国人E. サトウ，アストン，チェンバレンの文法書ならびに会話教本の内容を再検討するつもりであるが，その過程でブラウンの分析能力と言語の感覚の鋭さを再認識させられるに違いない。ブラウンの日本語分析の要点は，英語との対照を基本とし，日本語の歴史的研究とともに，外国語としての日本語観を持ち続けたことである。文法用語の選択や日本語の記述に違和感を覚えるものもあるが，それは当時の入手可能な研究資料からして，それ以上，それ以外のものを望むのは無理だったのかもしれない。しかし，日本語の体系と用法の概論を理解するには，当時の国語学の文献を読むよりブラウンの文法書のほうがわかりやすい。今日，あるいは将来の日本語教育界に必要なのは，ブラウンのような外国人研究者が示した言語観と実証的な研究方法であろう。

注　　釈

＊注１：出版社「凡人社」1999～2000年版日本語教材リスト，第29号

＊注２：99年度版（98年12月調査）の仮集計値による報告書，出版時期未定

＊注３：Kazuko Nakagawa, "Learner types and learning style preferences", Institute of Education,University of London, 1988（目的や専門の異なる英国の大学生の学習の理解の仕方や好みに関する調査報告書の一部）

＊注４：正式な名称はさらに長く，次頁に記載してある。

＊注５：Thomas Prendergast (1806～1886) は英国生まれ，19世紀後半の英語教授法研究者。古典的な文法訳読法を改革し，短文の暗記や言葉の組合せ等の練習を入れた実用的な教授法を提唱。

＊注６：書名は長いので本文中は省略した名称を使用。原本は横浜開港記念館所蔵のものを閲覧した。考察には参考文献一覧にある複製本を使用した。

＊注７：メドハースト以後，ブラウンに至る英語系日本語研究者のうち，杉本つとむの研究によれば，リギンス（1829～1912，米人宣教師，1860年日本語会話本刊行）のローマ字がブラウンに影響を与えたという。

＊注８：原文にはアクセント表示はない。起伏型か平板型かの区別のために筆者がつけた。

＊注９："postpositions"（助詞）と区別をするため，"Constructive particles"について「構成助辞」という訳語を用いた。

＊注10：例えば，『日本語初歩』（国際交流基金，1981）では，「動詞＋テ形」の用法（並列，原因，手段，目的など）を第13課で，「名詞＋デ」（材料，原料）を第20課で指導するようになっている。

＊注11：幕末の国語研究家，僧義門（1786～1843）の『活語指南』（1844）の中で，未然形（未だ―仮定条件）と己然形（既定―スデニスンダ）の違いを説明した，とある。

＊注12：「己然形は文語にあるが口語にはない。代わりに仮定形がある。」という古典文法の解釈に添えばブラウンの説明が理解しやすい。

＊注13：誤植と思われるが，「お」が欠落している。

＊注14，注15：第一種の受身は可能とあるが，「自発」の意味と考えられる。また，原文の「作れる」はこの場合「作られる」（受身形）の間違いと考えられる。

＊注16：形容詞＋名詞の例として，漢語形容詞の「丁」と名詞の「度」を出している。

＊注17：助詞「ノ」を"constructive particles"と"postpositions"の両方に入れている。属格の意味とは別に，主格ガと同等の働きをするノを特別扱いしている。

＊注18：『言語四種論』(1824，文政七年)に，テニヲハを他の三種(体／作用／形状）の詞とは異なる働きをするものと分類，説明している。

主要参考文献および資料

・Stefan Kaiser(1995), The Western rediscovery of the Japanese language, Vol.2, Curzon Press, England ("Colloquial Japanese"の考察はこの復刻版によった)

・加藤知巳，倉島節尚（1998)，『幕末の日本研究－会話日本語』，三省堂

・Anthony Alfonso (1966), "Japanese Language Patterns" (1 & 2), Sophia University

・E. H. Jorden (1963), "Beginning Japanese" Part 1 & 2, Yale University Press

・W. H. Medhurst (1830), "English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary, compiled from native works.", Batavia

・松本喜美子，佐々木満子（1956)，「S.R. ブラウン」(『近代文学叢書第1巻』より)

・J. C. Hepburn (1867, 1886)，『和英語林集成』初版（上海版)，第三版（丸善商社)

・福島邦道（1973)，『キリシタン資料と国語研究』，笠間書院

・佐久間鼎（1957)，『現代日本語の表現と語法』，恒星社厚生閣

・時枝誠記ほか（1968)，『講座日本語の文法』（1～4巻)，明治書院

・松村明編（1969)，『日本語文法大辞典』，明治書院

・阿部健二（1986)，『国語文法史論考』，明治書院

・S. Greenbaum, R. Quirk（池上嘉彦ほか訳）(1995)，『現代英語文法―大学編』，紀国屋書店

・A. P. R. Howatt (1984), "A History of English Language Teaching", Oxford University Press

・杉本つとむ（1989)，『西洋人の日本語発見』，創拓社

S.R. ブラウンの "Colloquial Japanese" の原本については横浜開港記念館所蔵のものを閲覧している。複製本が最近相次いで刊行され，考察に活用できた。その他，明治以前の資料収集に関係者のご協力をいただいた。ここにお礼を述べたい。

Studies on Japanese language textbooks written by Westerners in Meiji Period (1) —— S. R. Brown's "Colloquial Japanese" and its significance on Japanese language education today.

Kazuko Nakagawa

An increasing number of Japanese language textbooks have been published over the last ten years. Learners are able to choose texts suitable for their needs: some are for university students, some for people specializing in business, engineering, or other sorts of acting. Many teachers and learners accept the idea that in acquiring a foreign language communication practice in these languages is essential. At the same time, many learners may insist on acquiring precise information about the language, especially with regard to the grammatical structures or the meaning of words. This tendency can be seen more clearly when the learners are adults who are well-versed in their first languages or have previous experience of learning foreign languages.

Interestingly, the textbooks written by foreign educationists or researchers tend to focus on the grammatical aspects of the target language by means of comparison with their own languages. Textbooks such as "Japanese Language Patterns" (Sophia University, 1966) or "Beginning Japanese"(Yale University, 1963) were written in English and in romanized Japanese by foreign language specialists. These textbooks have been widely used around the world and have acquired a good reputation amongst both teachers and learners.

We need to be aware of foreign scholars' great work, before and after the Meiji Period, on the writing of Japanese textbooks and dictionaries, when very few references could be acquired. In this paper the author is focusing on S. R. Brown's "Colloquial Japanese" which was published in 1863. This American scholar and missionary successfully completed his textbook for learners

of Japanese, with detailed grammatical notes on the spoken aspects of the language and a good collection of different speech levels. His work contributed to other British Japanologists, such as E. Satow, G. Aston, and B. H. Chamberlain who were widely regarded as being the most excellent scholars on Japanese studies during the Meiji Era.

The paper also offers an opportunity to consider the significance of Brown's work in terms of Japanese education today.